「地理歴史（日本史)」の出題の意図

問題はいずれも、①日本史に関する基礎的な歴史的事象を、個別に記憶するのみならず、覚えた事実を互いに関連づけ、統合的に運用する分析的思考を経た知識として習得しているか、②設問に即して、受験までに習得してきた知識と、設問において与えられた情報とを関連付けて分析的に考察できるか、③考察の結果を、設問への解答として、論理的な文章によって表現できるか、を問うています。歴史的な諸事象が、なぜ、どのように起こったのか、相互の間にどのような関係や影響があったのか。それを自ら考えつつ学んできた理解の深さと、自らの理解を論理的に表現する力を測ろうとしています。

第 1 問は、9 世紀前半と後半の政治の変化を、承和の変の意義を中心にして、その背景を広い視点から問うものです。天皇のあり方の変化（幼帝の即位）と、官僚制や法典・儀礼の整備、藤原良房・基経による摂政の成立とが相互に関連しながら、安定した体制が生まれることに気付いてもらうことを意図しています。

第 2 問は、荘園領主と地頭との関係を地頭による開発を切り口にして問うものです。開発の成果を荘園領主・地頭がそれぞれどのようにして吸収、もしくは確保しようとしていたかを説明文から読み取ることが求められています。また教科書でもよく取り上げられる地頭請が地頭の荘園支配に果たした役割を具体的に理解できるかが解答の要点になります。

第 3 問は、富士山の噴火で降砂の被害が出た地域の救済にあたり、幕府がとった方針とそれに伴う問題について、当時の財政状況をふまえて問うものです。酒匂川上流域と下流域とで幕府の対応が異なった理由について、それぞれの地域的な特質や砂除に伴う事情を説明文から読み取ることで考え、複数の事柄の結びつきを整理して説明することを求めています。

第 4 問では、明治・大正期における華族について、立憲主義との関わりから問いました。主として制度面の史料を読み取ることで、華族の構成や役割が変化していったことを把握し、整理して記述することを求めています。衆議院と貴族院からなる二院制による立憲政治において華族がもった意味について、気づいてもらうことを意図しています。